

塩原俊彦著

『「軍事大国」ロシアの虚実』

(2009 岩波書店)

中山 弘 正
(PRIME 客員所員)

著者の塩原氏には、すでに『ロシアの軍需産業』(2003年、岩波新書)があり、軍需産業を含めた経済全体についても、『現代ロシアの経済構造』(2004年、慶応義塾大学出版会)、『ロシア経済の真実』(2005年、東洋経済新報社)などすでに相当の業績がある。にもかかわらず、本書が上梓されたことを、著者は次のように述べている。「……『軍事大国』ロシアという『神話』について、本書で本格的に論じてみることにした。これまでのインフレ下における軍事費増大というロシアの現状分析に加えて、ロシアの軍改革が具体的に何をし、その成否はどうだったのかを検証したいと思ったからである。スホイやミグといった有名企業はいま、どうなっているのか、といった素朴な疑問に答えることで、『軍事大国』ロシアの正体に一歩でも近づきたい。それが本書を執筆した動機といえる。」(はじめに) 動機は明快であろう。

評者は、ロシア・ソ連の「農業問題」が主要テーマの者であるが、これを裏側とすると表側の「軍事問題」もやはり無視はできず、ペレストロイカ期からソ連邦解体期の「軍事」を少し調べてきた者である。⁽¹⁾

本書の構成は次のとおりである。

序 章 「強いロシア」の虚実

第1章 難航する軍改革

第2章 「軍事大国」の軍事費と軍備増強の実態

第3章 積極的な武器輸出と武器外交の行方

第4章 急速に再統合化される軍産複合体
終 章 新しい「軍事大国」めざすロシア

序章 米国軍事力の突出を先ず確認する。とくに2002年以降それは大幅に増加した(1頁)。07年の米国軍事費支出は世界全体の45%、ロシアは3%というSIPRIのデータを紹介している(3頁)。核弾頭保有数などで、「曲がりなりにもロシアは『軍事大国』としての面目を保っている(5頁)」が、「軍事配備面」などではアメリカが圧倒的優位である(7頁)。NATOが拡大変質してきたことにロシアは大きな脅威を感じている。ウクライナの動きがロシアを刺激している。

第1章 先ず「どう改革しようとし、どこまで改革できたのか」を検証している。そもそも軍といっても、国防省管轄下以外にも、国境警備隊、内務省軍、鉄道隊等々があり(32頁)複雑である。2000年頃には、戦略ミサイル軍出身の国防相セルゲーエフと、クワシニン参謀総長が基本軍事政策で対立した(38頁、評者も論じたことがある)。プーチンは、セルゲーエフを更迭し、イワノフを後釜に据えた(39頁)。徴兵制から志願兵制への移行が敢行されはじめた(45頁以下)。組織改革(49頁)や軍の福利厚生(53頁)なども検討されていく。07年、余り進展しなかったイワノフ下の軍改革のあと、07年2月セルジュコフが国防相に任命された(56頁)。セルジュコフの人事異動や財政資金利用への監視体制強化などを評価し、著

者は彼を「過去の国防相とまったく異なるタイプの人物」と見ている（64頁）。今後の課題は「ハイテク化がカギ」（66頁）とするが、ハイテク分野でウクライナ企業に多く依存している点なども問題点と見ている（67頁）。だが、根本はエレクトロニクス産業のハイテク化そのものにかかわる、とする（70頁）。

第2章「軍事費」の検討から入る。99-08年の総括表、対GDP比（3.5~3.6%前後）（80-81頁）等が示され、非効率利用等々の問題点も指摘されている（84頁）。軍備増強の実態という項目の下には、「欠陥品というジレンマ」とある（88頁）。「国防発注の推移」という表（90頁）がしめされるが、これは「国防省のみの数値にすぎない」（89頁）とすぐに注意がなされている。また、国防と国防発注の推移を対比した表もあるが（92頁）、国防発注は5%強位で、「多くは人件費に費やされていると思われる」（同頁）とされる。また、「国内の軍需産業にとって、その最大の牽引力が武器輸出であった点」に注意喚起がなされている。ドル決済を基本とし、前渡金が入る輸出は軍産複合体にとってより貴重な取引だった（93頁）。例えば、「国内調達」と「輸出売り上げ」を対比した表では、戦車31輦対435輦、航空機7機対278機、等々だったという?!（94頁）。こうした状況もふまえると、「世界的不況のなかで、ロシア経済も深刻さを増している。」（99頁）ということがよくわかる。

第3章「プーチン政権下で武器輸出は順調に増加傾向をたどってきた。」（100頁）米国の年約150億ドルの約3分の1（101頁）。ロシアの武器輸出独占企業を追及し、その推移を追っていく（106頁）。ROEを軸とするが、この推移・問題点は複雑である。さらに航空機（中国、インド、アルジェリア、ベネズエラ、その他）だけでも相当細かく検討されていく。中国はもはやただの市場ではなく、「明確なライバル」（125頁）ともなっ

てきた。インドも、ロシア製に疑問を感じて、米国のものを優先する傾向が出てきたりしている（129~131頁）。「ロ仏の不思議な武器輸出入関係」（144頁~）なども言及されている。ロシア側に自国の軍備向上のねらいもあると分析されている（145頁）。

第4章 ほぼ50頁を当てて、詳しく論じられている。そもそも軍産複合体とは何か、民営化の失敗と不透明性、がまず論じられる。「軍産複合体の定義」—米国でいうのと異なり軍需産業のみを意味する（146頁~147頁）。著者の詳しい定義（147頁）でのロシア軍産複合体は 投資額、従業員数、生産高で90年代に減少してきていたが、2000年代に入り「回復基調」をたどって来た（150~151頁）。質的にも、「競争力のある軍産複合体がめざされて」来た（154頁）。それでも、じつは、国際的に見ると、売上高で世界一のロッキード・マーチン社の7.5%（2007年）にすぎず、ロシアの軍需企業は小規模である（159頁）。スホイやミグなど航空機関連企業がやや詳しく論じられている。プーチンが05年、ロシアの航空機メーカーを統合した統一航空機製造コーポレーション（OAK）の設立を強調し、06年に出来た（161頁）。詳細に展開されていて、これが2025年までに民間航空機製造で世界市場の10~15%のシェア獲得をめざす等々と述べられている（166頁）。ロシア製民間航空機は相次ぐ事故等々で不振が続いてきたのである（169頁）。「エアバスとボーイングが近年、1日に少なくとも旅客機1機を生産するのに対して、ロシアではよくても1カ月に1機を生産するだけであり、その生産性はきわめて低い」（170頁）のが実情である。著者は、軍民転換の推進上も旅客機開発は重要な意義をもつ、としつつも、「その成否は現段階では不明だ」（174頁）としている。造船関連でも、統一造船コーポレーションのことが中心的に検討されている。あの原潜事故にもかかわらず、「06年から9年間に、5

隻の戦略原潜の建造が計画されている」(187頁)という。第4章の最後は「軍産複合体の課題」でしめくくられているが、経済恐慌の状況の下で「ロシアの軍産複合体そのものの経営にも悪影響が現われている」(193頁)し、政府は資金面から支援をしているが、先は不透明なことが示されている。

終章「軍事大国」ロシア、の「虚」の部分は相当判明した、とし、「軍事政策上の課題」として、「軍事力の削減という明確な方向性に乏しい」、「軍民転換の重要性は薄れていないのだが」、「ロシア軍のこれまでの改革は『微調整』にすぎない」、「技術劣位なので、先進国からの技術移転が必須」、「軍産の企業城下町などの存続が困難になっている」等の点が指摘される。「軍事大国」化は簡単ではなく「挫折」「変節」の見通しが強い、と結論しているといえよう。

以上、ほんの要点のみをかいつまんで紹介したが、以上の紹介だけでも、本書がソ連邦解体後のロシアの「軍事大国」願望がいかにか困難なことであるかを、実に丁寧に、また継続的に、たくさんの資料に当たって具体的に明らかにしているかわかるであろう。

「市場経済」に移行した、ロシアはもう「資本主義なのだ」といいながら、「社会主義・共産主義」時代のソ連邦の、ある種の「大国」意識が色濃く残っていて、いっこうにそれを脱け出せないでいる、そのようなロシアの現状を實に見事に解明しているといえるであろう。

旧ソ連邦時代であれば、独特の秘密主義もあって情報やデータは伏せられ、それゆえ場合によっては、大きくも強くも見せかけられたことでも、市場だ、資本だ、公開だ、競争だ、ということになれば、それは不可能である。本書は、現在そのような矛盾した存在である「大国」ロシアを軍事面から切り込むことによって、非常に明瞭に照ら

し出した作品といえるのではあるまいか。

参考文献の終りの方に、「新聞・雑誌」として22点、「インターネット情報」として7点が掲げられているが、これだけでも毎日のように目を通すだけでも本当に大変な作業であろう。こうしたご苦勞もあって、本書のデータはきわめて新しく、ごく最近のものに及んでいる。著者の勞を多とするとともに、本書が現代ロシアそのものを知る上できわめて貴重な作品であるゆえに、多くの方々に読まれることを願うものである。

註

- (1) 農業問題については、『現代ソヴェト農業』(東京大学出版会、1976年)、『ソビエト農業事情』(NHKブックス、1981年)など。軍事問題を初めて論じたのは、倉持俊一編『等身大のソ連』(有斐閣、1983年、第三章)。また、『ロシア 擬似資本主義の構造』(岩波書店、1993年)では、連邦解体期のウラル地域の軍需企業の見学などを含めて検討した。そして、上垣彰・栖原学・辻義昌氏との共著『現代ロシア経済論』(岩波書店、2001年、第一章)。

